

Hilltop High School 受け入れ

2016. 09. 28 Wednesday 06:25



9月21日(水)～9月27日(火)までの7日間、アメリカのサンディエゴにある Hilltop High School から、6名の生徒を国際クラスで受け入れました。

HilltopHS の来校は昨年に続き2度目となります。メキシコ国境にも近い HilltopHS は、多様な文化をもつ生徒が通っており、7か国語を学ぶことのできる「FLAGS」というプログラムがあります。今回は FLAGS の主任でもある足立先生の引率のもと、日本語を専攻している生徒たちが来日し、国際クラスの生徒の家庭にホームステイをしながら過ごしました。

生徒たちは互いに英語に日本語を織り混ぜながらコミュニケーションをとり、共働して課題に取り組んでいました。



フィールドワーク:津島毛織工業協同組合、株式会社 SK デザイン、伊藤織物

2016.08.01 Monday08:01

7月20(水)に津島毛織工業協同組合、株式会社 SK デザイン、伊藤織物を訪問しました。初めに津島毛織工業協同組合の安達友彦様から津島市における繊維産業の歴史や現状についてお話を伺い、その後、津島の街並みを散策しました。また、株式会社 SK デザインと伊藤織物では、工場見学を行いました。

津島毛織工業協同組合では、毛織物の産地「尾州」の一つの地域として発展してきた津島の歴史を伺いました。明治時代、津島に住んでいた片岡春吉という方が織機の開発をし、その技術を隠すことなくたずねてくる人に教えたことで、津島の繊維産業は発展しました。

織物の歴史を知ったうえで津島市内の散策をしました。古くからの街並みが残り、寺社仏閣も多く、歴史を感じられました。天王川公園には片岡春吉の像もあり、この地が織物の盛んな地であったことが感じられました。



株式会社 SK デザインでは、織物のサンプルを作っており、実際に作業しているところを見学しました。尾州の繊維産業は伝統産業と違い、機械で作られるものですが、機械を動かすための準備も技術がいる作業であり、覚えるのも大変だということがわかりました。

最後に伊藤織物に伺い、織機の見学をしました。織機は、昭和20年代から使っており、現在も健在でした。ここまで綺麗に現在も使用している織機は少ないそうです。

今回の活動を通して、身近な生活エリアであるにもかかわらず、そこにはしっかりとした歴史があり、織物の高度な技術を持っている人がいることを初めて知りました。最近の技術に任せるだけでなく、古くからの技術を受け継いでいることが素晴らしいと思いました。



フィールドワーク: BOP ビジネス マイウッド・ツー(パームホルツ)株式会社

2016.07.27 Wednesday 11:33

7月14日(木)、課題探究のフィールドワークとして国際クラス3年生2名で犬山市へ、BOP ビジネスを展開している企業の会長をされている福山昌男様を訪問しました。

人と人とのつながりを大切に

訪問した生徒たちは「BOP ビジネス」をキーワードに研究しています。日本企業の BOP ビジネスの課題や現状についてお話を聞かせていただきました。福山様は、国際協力機構(JICA)さんにご紹介いただきました。JICAさんと連携をとりながら、コロンビアにてオイルパームを活用したビジネスを展開しています。

参考: http://open_jicareport.jica.go.jp/pdf/12183463.pdf



実際に BOP ビジネスを行われている福山様からのお話を聞いているうちに、ビジネスを行う際には人と人との関わりが大切になってくるということを改めて感じることができました。

まず、福山様が BOP ビジネスを行おうと思ったきっかけである海外からの研修員の受け入れ。そこで彼らの現状を知り、ビジネスに挑むことになったそうです。そこから日本内の学者の方々や現地に住んでいる人々とも協力し、現地の課題解決、また彼らの雇用機会を増大させることのできるビジネスを完成させました。

今回のフィールドワークでは、自分たちの考えている BOP ビジネスや日本社会の未来などいろいろなことについて話し合うことができ、貴重な体験となりました。

第4回 G サロン 7/9

2016. 07. 15 Friday 08:34

☆テーマ「多様な社会に向けて」

講師 渋谷 努教授 中京大学国際教養学部

<日本に暮らす外国人について>

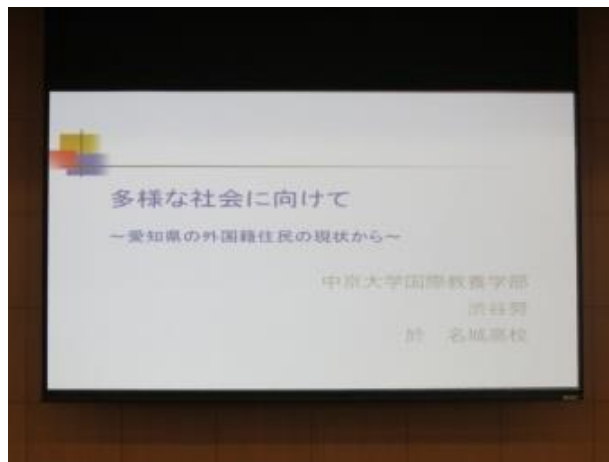
○全国的な動向

外国人/移民といえば、出稼ぎという固定したイメージでとられがちである。しかし、背景にある多様な現状について知ってもらいたい。現在、外国人登録者は約23万人。これは日本の人口の1.7～1.8%ぐらいで世界的にみれば決して多いわけではない。居住地は東京が全体の

20%ぐらいと圧倒的に多く、大阪・愛知は9.4%とほぼ同じくらい。日本各地に点在しているというよりは、大都市や工業が盛んな地域に集中している。また、永住者は徐々に増加している。

○愛知県では

世界にある国の数196国に対して、名古屋には138国の外国籍住民が住んでいる。すなわち、多様な国籍の人々が暮らしているということは、それだけ多様な文化が存在しているということである。



<多様な外国籍住民>

○年代別に見た愛知県に住む外国籍住民

20,30,40年代がやはり多い。その反面、日本に住んでいる外国人の高齢化が進んでいる。65歳以上の外国人は圧倒的に韓国・朝鮮が多く、年少・生産年齢人口はブラジルが多い。特に、名古屋市内で見ると65歳以上が9%であり、愛知県全体で見ると高年齢化が進んでいる。

○多様な団体による活動

マダン(高齢者福祉)・東海外国人生活サポートセンター(医療通訳・介護通訳)など外国人を支援する団体を外国人が運営している。

○障害者に対して

特別支援学級に通う外国籍児童は2007年49人→2012年120人と増加している。潜在的に存

在しているだろうが、もう少し多いのではないか。また、言語が話せないことが要因なのか、発達障害が要因なのか判断できずに、親も教師も気づいていない可能性もある。

<豊田市保見団地での調査>

○保見団地とは

豊田市にある団地で、外国籍住民がとても多い。特にブラジル人が多く、外国籍と日本籍が 50:50 ぐらいである。

○調査結果から見えた現状

やはり単純労働者の割合が多い。

しかし、非正規の単純労働者から正

社員となり、家の購入をしている人もいる。また、滞在の長期化から日本人の友人が増加し、まちづくり活動へ参加するなど地域社会への適応が見られる。第二世代は、日本語はおろかポルトガル語も中途半端な一方、日本での生活に慣れてしまい、親世代が従事していた重労働に耐えられずにバイトでつなぐ底辺層がいる反面、大学に進学し、語学力や異文化適応力が高いエリートが生まれてきている。



<多様な社会とは>

今まで以上の多言語、多宗教、多民族化となる一方で、高齢化・複合マイノリティ(言語上のハンディキャップ+発達障害)などの問題も出てきている。今後は、多様性のある、様々な可能性を育てられるような社会の仕組み作りが必要になってくる。

フィールドワーク:円頓寺商店街 那古野下町衆

2016.07.07 Thursday13:53

6月23日、「課題探究」の一環で国際クラス3年生5人が、円頓寺商店街「野田仙」さん2階にて那古野下町衆の皆さん(高木理事長、岩井理事長、田尾理事)を訪ねました。主にインバウンドや商店街の振興などについて、円頓寺商店街の取り組みについて話を伺いました。

円頓寺商店街の振興とインバウンドへの取り組み

6月23日、「課題探究」のフィールドワークとして、国際クラスの5名が円頓寺商店街を訪ねました。テーマとして、「インバウンド観光」や「商店街振興」について円頓寺商店街連盟理事長の高木様をはじめ、3名の方にお話を伺いました。

円頓寺商店街は堀川の物資運搬の休息の場として作られた城下町がもととなって栄えた商店街です。そのため、物資を貯めるための蔵や、橋などが今でも残っており「四間道」として根付いています。この「四間道」は産業観光として人気がありボランティアガイドや街歩きのマップを制作しているそうです。



円頓寺商店街のインバウンド観光の対策として、英語の案内人を手配したり、ゲストハウスを開設したりしています。しかし、売り上げの点では外国人観光客の影響は少なく、買い物というよりは観光や食事などの割合が多いそうです。また、ハラルフードに関しては申請があれば対応する程度だそうです。

商店街の振興について、大須商店街と同様に「人と人とのつながり」を大切にしているそうです。組合内だけでなく、常連客や地域の方々など幅広いつながりの輪があります。

円頓寺商店街の店舗数は高齢化などによって減少傾向にありますが、円頓寺商店街は近年V字回復に成功しています。その要として、少ない店舗数でもイベントなどの話題性や歴史の深



さといった魅力があり最近では多国籍な店舗や古民家カフェなど若者を呼び込む取り組みにも力を入れ昔と違った客層からの人気を集めV字回復に至りました。

